２０１７年５月６日　発行　No１７

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

マタイによる福音書28章18節～20節

追 悼 会

東日本大震災から６年が過ぎ、被災地では亡くなられた方を偲ぶ７回忌を迎えた。

今年の「宮城三陸3.11東日本大震災追悼記念会」では、「私は仏教徒ですが、参加しても大丈夫ですか」と言って入場される方々が目立ち、私たちが目指す誰もが参加できる追悼記念会となった。粛々と始まった追悼記念会は、すばらしいアーティストによる音楽コンサートで、参加者の心を暖かく包み込んだ。また、思いの込められたメッセージは、深い思いやりに満ちた感動と安心とを与えることができた。そこから育まれる関係は、異教徒であれ、無宗教であれ、互いに思い合う関係へと進展するはずである。感動、安心から育まれた相互関係は、相手を受け入れ、理解しようと努力する。

「どこから来たの？」「尊い働き、ご苦労様ね。」
日常的な何げない会話などからも、相手を知り、理解しようと試みる。
「以前、住んでいたところに、季節折々の花が咲いていたのよ。」
「お姉さんの好きな花は？」
心情を分かち合う大切な時間である。
「お母さんの好きな花は何ですか？」
「じゃ、こんど訪ねるときには、その花、持って来るね。」

私たちは、時間と経済を用い、その方の処（ところ）へ訪ねる。時には、犠牲を払ってでも、その時間を優先するのである。ここで大切なのは、福音を伝えるためではないということだ。誤解のないように願いたいのだが、「福音を伝えるため」の手段では、相手に見抜かれてしまう。私が活動する現場では、こんな言葉がよく聞かれる。「やっぱり、それが目的だったんでしょう」「結局、自分の思いを押し付けるんだよね」に至ってしまう。

相互関係が築き上げられていない中で福音を伝えるには、動機が大切である。「伝えること」だけが大きくなると、「二度と関わりが持てない」という事態にも陥りかねない。イエスさまから与

えられた恵み、誰もが与えられているチャンスとしてのサポートの機会、それを妨げないように注意する必要がある。
追悼記念会を通して築いた関係を、時間を掛けながら「大切にしたい」と思っている。（文責：中澤竜生）

扶 助 基 金

扶助基金は、昨年末から某地域で始まった（東北ヘルプニュースレターを参照）。始まる当初、地域とつながる地元NPO団体や、外部の支援団体からいぶかしげに思われた。それだけではなく、強い反対もあった。
なぜ基金を立ち上げようと思ったのか。それは、自治会でもなく、支援者でもない、地域に住む信頼できる身近な人の何気ない話しからだった。
「いやー、中澤さん。あの方は引越ができないんだよね。」「あそこの方、カーテンが買えないと言ってたので、支援者にカーテンをお願いしたんだよね。」「身内が結婚するみたいなんだけれど、お金がないみたいで…。少しだけど応援したんだよね。」などの何気ない会話だった。私は思った。「この人は、あらゆる方から信頼されているんだ」と。さらに「この人のサポートを誰がしているのだろうか？」とも思った。
被災者たちが、今の仮設生活で経済に困窮しているのであれば、家賃がかかる生活になった場合、さらに困難になるのではないか？案の定、その不安は的中した。「中澤さん。引越が出来ない人がいるのよ。」といった諸々の話しは、緊急を要するものだった。基金の思いは、そこから湧いてきたのだ。
引越に関する費用は、春の時期であったために高額で、対象世帯も多く、とてもまかなえるようなものではなかった。この問題について、専門的な方を交えて話し合い、行政に検討してもらう方針となった。その結果、引越し費用を申請された方は、業者が見積もった後、行政と引越業者との間で費用のやり取りをすることになった。南三陸町では、引越費用の心配が無くなったのである。しかし、引越後の慣れない生活が思わぬ事態を発生させ、「やはり、基金をつくれないだろうか？」という考えに至った。

コミュニティが形成されていない場所での訴えだったため、基金を集めることに反対する団体や、地元の有力な支援者の反対意見が相次いだ。理由は「自立を妨げる。」「緊急支援はもう既に終わっている。」「平等ではない。」「中澤さんは甘い。」などだった。また「世話人をサポートするのは良くないのでは？」「あの方を応援するのは反対だ。」とか、本当に上手く行かないものである。新しいことを始める場合、様々な反対があるのは承知しているが、ここで気持ちが下がれば、「困窮者は倒れる」と思った。
そこで「密やかに、静かに、プライバシーを守りつつ」賛同していただける方とともに基金を募ろうと取り組みを始めた。「扶助基金」の名称で、実行委員会も立ち上げた。全員がクリスチャンだ。
「扶助基金」の働きは、金銭面の支援だけではなく、地域の世話人とともにカウンセリングもする。今では「生活支援センター」や「社会福祉協議会」の方たちが、「この地域には扶助基金があるようです」と、相談に来た当事者に薦めて繋いでくれる。もちろん「扶助基金」は一時的なもので、経済支援は２回までとなる。それ以上の経済的支援が必要な場合は、生活保護も含めて、その他の

あらゆる方法を用いて支えるようにする。また、この基金の仕組みは、外部から与えられる資金がベースとなっている。感謝なことに、すでに100万円を越える基金が与えられた。１地域20万円をベースにして、今では４カ所（南三陸、石巻、福島）にまで拡げて企画展開中である。今後この基金は、それぞれ地元地域ごとで展開することを目標としている。つまり支援を受けた方は、自らも募金できるように努める。「助け合う心」を養う、これを目指して働きを進める必要がある。特にリーダー（地域の世話人）となる方は、権力を振るわず、高慢に陥らず、どんな方とも謙遜と熱心をもって向き合い、秘密を厳守するとの確認を常にとっている。私自身、こうしたことは本来、教会の役目であると感じ、この地の御国はこのようにして成就するのではないかと現場で教えられている。（文責：中澤竜生）

東日本大震災を振り返って

はじめまして！私は仙台宣教センターの中澤義道と言います。父・中澤竜生、母・佳子の間に５人兄弟の内の３番目の長男として生まれました。生まれは青森県ですが、父が宮城県の教会の牧師に任命されたことをきっかけに、現在の仙台宣教センターに引っ越してきました。小中高と学生時代はここ仙台で過ごし、故郷のように感じています。

東日本大震災が起こった時、私は１８歳でした。震災当初から父や多くの活動者とともに被災地での支援や被災者と関わってきました。そして現在も、父が実践する宣証の働きを補佐する一人としてセンターの活動状況などをお伝えするホームページの管理、センターでの音楽や聖書の証の奉仕、イベント準備（災害復興住宅・福祉施設・協力教会等の場所）の活動をしています。また、私は2016年夏に結婚し、妻の支えもあり、センターの奉仕を継続しています。一週間のうちの平日は会社に勤務し、週末や隙間時間を利用して仙台宣教センターの働きに参加することが現在の私の生活です。

さて、大きな被害をもたらした東日本大震災が起こってから今年で6年目となりました。今年の3月11日も各地のキリスト者が一致し、震災当時を振り返り、今も苦しい胸中にいる隣人のために祈りを捧げました。

私も働き人の一人として震災当初を振り返るときが与えられました。震災当初の光景としてよく思い出すことの一つに、ガソリンが足りなかったことがあります。全国各地から多くの物資が届きますが、持っていくためには燃料は不可欠です。「ガソリンが足りない」と情報発信すると、同教団の牧師はいくつかの携行缶にガソリンを給油して届けてくださいました。その携行缶にホースを直接取り付けて給油する光景を見たときには、何かの映画のワンシーンのように思えてなりませんでした。普段は見ない光景だけあって異様でもありましたが、マニュアルにはないイレギュラーな対応のおかげで物資を被災地に届けることができたのだと思います。

「あの携行缶での給油がなければ物資の搬送はどうなっていたのだろう」と思うと、キリスト者にある兄弟姉妹の支え合いは尊く感謝するものでした。と同時に、一致した祈りを神様が聞いてくださり、またそれに応えてくださったのだと喜びを表現せずにはいられません。私のこ

れまでの人生の中でまだ味わったことのなかった「神様における一致」であったと今も改めて実感します。

こうして東日本大震災が起きてからの出来事を振り返ってみると、震災当時からの出来事の動きは目まぐるしく、経験したことが多々あるために一つにまとめてお話させていただくのは難しく思いました。だからこそ自分の備忘録としても、当時を振り返った内容を書き起こして、今後もニュースレターで継続してお伝えできればと考えています。

ある仮設集会所の最後のイベントが終わる

平成29年4月22日土曜日に宮城県登米市南方町にある仮設住宅でレクリエーションや特産のうどんを一緒に食べるイベントが行われた。「上尾明るい社会づくり運動」がこれを主催し、中澤竜生が場所と人をコーディネートしている。

この登米市南方町のイオン跡地に建てられた仮設住宅（以降、南方仮設と呼称。）には震災後351世帯の被災者が生活をしていた。ここの仮設は、2011年～2012年頃、炊き出しをすれば1000人分の食事提供が必要なほどに仮設住宅の規模はかなり大きいものであった。大きいだけに関わりも多い場所で、私たちが中心の活動地としていた南三陸町に住む人もこの南方仮設には少なくなかったので、南三陸町と南方仮設を往来する数は計り知れないほどである。

そんな南方仮設でも月ごとに復興住宅などの新地への移転が進み、現在は61世帯となっている。自治会長は「もう移転が進み、イベントに集まる人は少ないと思います。」と言われるが、「少なくてもやらせてください。」とお伝えした。イベント当日になると、集会所に集う参加者は予想の人数を超えて24名が参加した。以前、南方仮設に住んでいた方が、最後の仮設イベントになると聞いて来てくださったのである。

イベントは手足を使った健康運動やダンスなどのレクリエーションで賑やかに始まり、大きな動きを必要とする運動も全員が元気よくこなしていた。生き生きした様子が見られるというのは本当に嬉しいですね。運動をこなし後は、昼食の時間になり、埼玉県特産のうどんが用意された。この時間が本当に良き交わりをするために活かされた。再会を喜び合う人たちや、たわいのない世間話やこれからの生活はどうなっていくのかなど。各々が話をしてリフレッシュしているようであった。

このイベントを以って南方仮設での活動は終了となる。自治会長は私たちに「解散はするけども、ぜひ次の住処である南三陸町にも来てください。」と喜んでお誘いしてくださいました。ちなみに、まだ次の住居では自治会はできていないようだ。

今回、終始笑顔の絶えない素敵な時間になりましたが、今それぞれが次の新しい生活を始めたばかりでありますから課題は以前より多くなっているのは間違いないでしょう。引き続き覚えてお祈りをお願いいたします。　報告:中澤義道

今 後 の 活 動 予 定(仮)と 目 標

○　南三陸町応急仮設住宅は、2017年夏頃から順次に閉鎖致します。よって、復興公営住宅に安否を問う働きを続けていきます。地域支援ネット架け橋は5月からも地域コミュニティ支援、一世帯・個人への関わりを継続します。

○　地域コミュニティ支援として、イベント（演歌、講演等）及び茶話会（カフェ）を継続します。

○　「宮城三陸3.11東日本大震災追悼記念会キリスト者準備委員会」による、来年の開催に向けて話し合い。

2017年追悼記念会準備委員会の様子。

○　登米市、南三陸町で活動するクリスチャンが「実践宣証会議」に参加し活動情報を共有する。また、地域で誕生したクリスチャン及び、求道者をクリスチャンネットワークを通して御国の住人としてフォロする。または、天国に凱旋するまでサポートし合う。

○　「仙台支え愛サポートセンター」の働きを通じて、高齢化社会、過疎化問題にクリスチャンが如何に関わり、聖書の教えを地域に生かすかを実践をもって検討する。この取組には「他宗教」との関わりもある。

○　今までに続く「宣教」に関して、地方等に伝える「布教」のあり方を検討し研究と伝道方法を探る。
※その働きに欠かせないのが地元の歴史（キリシタン史跡）と地域の仕組み（講）である。

大籠キリシタンに訪問した
練馬教会チームが資料館館長と撮影。

尊いご支援を心から感謝致します。

前回繰越金：446,957円
収入：776,546円　（2016年12月22日－2017年５月１日）
ご献金を捧げて下さった団体様および個人様（敬称省略 順不同）
日本イエスキリスト教団京都教会、、基督聖協団本部、基督聖協団習志野教会、基督聖協団上田教会、基督聖協団中川教会、基督聖協団千葉教会、基督聖協団西入間教会、基督聖協団目黒教会、基督聖協団若潮教会、基督聖協団八王子教会、基督聖協団青梅教会、基督聖協団清瀬教会、基督聖協団焼津伝道所、上海たんぽぽ、萱島キリスト教会、新潟グレースネットチャーチ、清瀬グレースチャペル、サトウユキオ、基督聖協団信徒会、チャペルハーモニー、イザヤ58ネット、ユダカズコ、船堀グレイスチャペル、基督聖協団相模原教会、基督聖協団練馬教会、基督聖協団名古屋教会、基督聖協団上田教会、ハワイホノルルチャーチ、関ご夫妻、東北ヘルプ、基督聖協団仙台宣教センター

支出合計金額:1,143,503円(2016年12月22日-2017年5月1日)
食費、衛生費、光熱費、保険、車両交通費207,452円（車両経費含む）、事務費、通信費53,000円、啓蒙活動費、ネットワークサポート、慶弔費（30,000円）、修繕費、雑費、茶話会(Cafe)地域・自治会コミュニティ支援費（80,000円）、スタッフ費（50,000円）、追悼記念費（50,000円）、生活困窮者支援（13,000円）、被災地行事費（クリスマス会等）70,000円

次回繰越金：80,000円

私たちの働きは今後も資金が必要です。お話しする機会も与えて頂き、引き続きご支援、応援の程を宜しくお願いします。

PayPalよりクレジットや海外より応援して頂く事も可能です。
アドレスは　yoshiko.n36@gmail.com　です。
事務局：地域支援ネット架け橋　所在：宮城県仙台市青葉区愛子東3-14-22
電話：090-1069-3925　事務スタッフ：中澤佳子

【お振込口座】------私たちの活動のために
七十七銀行 宮城町支店　口座番号: 普 5497795
名義: キリスト聖協団西仙台教会かけはし会計 中澤佳子

郵貯銀行　口座名義；地域支援ネット架け橋（チイキシエンネットカケハシ）
口座記号番号；０２２９０－３－１４１０３１店名；ニニ九（ニニキュウ）店　（２２９）
当座；0141031

【祈りの課題】～地域支援ネット架け橋の働きが継続できること～

6年間続く活動では、a、クリスチャンであることを自負しつつ、多くの方と関わり続けて来ました。出会うことから、家族との交流や、個人との相談までと色々です。その関わりに神様の御思いが発見できることを望みます。b、「架け橋」の活動は、聖書の教えが実践される「御国の構築」プランがあります。そのための、地域コミュニティ支援は欠かせません。それで必要とされる「時間」「人」「経済」です。これらの継続のため、ぜひ覚えてお祈り下されば感謝です。